

日本語動詞の多義体系 (5)

国 広 哲 弥

練 る

「練る」の意味分析はすでに柴田他(1976)の「マゼル・ネル・コネル」の項でおこなわれており、その結論はそのままここで採用することができる。「練る」は自動詞用法と他動詞用法に分けられるが、自動詞の方は他動詞の比喩的な派生用法と見られるので、他動詞の方から見て行くことにする。

「練る」の他動詞用法

この動詞の基本的意味は〈可塑的な物質にいろいろな角度から押す動作を繰り返し加えて、その物質を均質化する〉ということである。可塑的な物質とは粘土のようなもので、多かれ少なかれ粘性を帯びており、押して変形すると、その形は元に戻らないのが普通である。均質化ということには「前よりもよい状態にする」という価値判断が含まれている。「練る」動作の目的は、対象物を前よりもよくすることであり、その動作の目立つ特徴は“繰り返し”である。この二つの点があとで扱う比喩的用法で用いられる。小内(1997)および手元の実例に基づいて「練る」の対象物を見てみよう。

餡、雲丹、芥子、粉、小麦粉、米糠、御飯粒、バター、味噌； 絵の具、香、膏葉、漆喰、セメント、にかわ、粘土、糊

「練る」が用いられる文型としては、[Pヲ + V] (対象物を動詞) のほかに [Pヲ + Iデ + V] (対象物を媒介物で動詞) がある。媒介物は液体であるのが普通である。

- (1) 近ごろ理学士藤野米吉君が、液の代わりに製菓用のさらし餡を水で練ったものの層に熱対流を起こさせる実験を進めた結果、...(寺田寅彦「自然界の縞模様」)
- (2) 白米飯に同量の小麦粉(別名・マッカーサーのプレゼント)を混ぜ、塩を振って練ればよい。このとき、鶏卵を落とした牛乳で練ることができれば言うことなしだが、[中略]修吾の家では水で練るのが普通だった。(井上ひさし「下駄の上の卵」)
- (3) 小麦粉をよく水で練りあげ、袋に入れ揉むと白い水が出る、...(山本周五郎「さぶ」)

「練る」は基本的には粘土のような可塑性のある物質を対象とするが、その派生的用法として、物質ではあるが可塑性のない物質を対象とする用法がある。その一つは古くからある「絹を練る、生糸を練る」である。これは絹・生糸を灰汁で煮て、含まれた膠質を除き、手で練ったかのように柔らかくすることを言う。さらに古い用法として「錬鉄」(ねりがね)がある。これは「金属を焼いて鍛える」(日本国語大辞典初版)ということで、熱して柔らかくしたうえで二つに重ねて叩くという作業を繰り返すことが粘土などを練ることに似ていると捉えたために生じた用法であろう。

「練る」の比喩的用法

現在では「練る」はむしろ無形のものに比喩的に用いられることが多い。これは基本的用法の中に含まれる〈対象物に繰り返して手を加えることによって質を均質化し、かつ改善する〉という要素に基づいて、〈対象物に繰り返し働きかけることにより不十分な点を除いて質をよくする〉という意味を引き出したものと考えることができる。

比喩的用法は、細かく見れば〈鍛える〉と〈改良する〉の二つの場合に分けることができる。

〈鍛える〉：技、腕(技術・能力)、精神、心、心胆、武芸、兵

〈改良する〉：案、考え、計画、構想、策、作戦、策略、思案、思想、準備、スケジュール、筋、想、対策、企み、表現、腹案、プラン、文案、文章、防止策、密謀、理論

上記とはさらに異なる比喩用法として「舟が練る」というのがある。『新明解』に「〔釣で〕風に向かって船をこぐ。」とあり、他動詞用法の一つとされている。しかし手元の唯一の実例は自動詞用法を示している。

- (4) 舟は、のんびりと潮の上を練りながら、青空の遥か下に小さく浮いている。(團伊玖磨「パイプのけむり」)
- (5) (参考例) 釣っている間中、舟は僅かにエンジンを掛けて、潮で流されぬように、所謂“練り”を続けている。(同前)

上に示した『新明解』の語釈は誤解を招きやすい。柴田他(1976)で指摘されているように、また実例(4)(5)に示されているように、この「練る」は舟を進めるのではなくて、風や潮に流されずに定位置を保つように、軽く漕いだりエンジンを回したりすることを指す。

「練る」の自動詞的用法

自動詞の「練る」は人間(のグループ)が方向をいろいろに変えながら歩くジグザグ進行を指す。したがって「練り歩く」の形で使われることが多い。ジグザグ進行は直線的な道の内部で行われることもあり、道の内部では直線的進行であっても、角をあちこち曲がるために全行程として見たときにジグザグ進行になることもある。いずれにしてもそこに見られるいろいろな角度での動きが、物を「練る」ときの両腕の動きと似ているために、この自動詞用法が発生したものと考えられる。

「練る」を単独でこの意味に用いることはいまではやや古風な用法となっているが、次の例がある。

- (6) 「きょうからは、この織田信長が京の貴顕や庶民の保護者になるぞ。治安をみだす悪者は首を刎ねてくれるゆえ、善人ばらは安堵せよ」ということを宣布するつもりであろう。馬に乗って都大路を練ったときの扮装こそ異様であった。(司馬遼太郎「国盗り物語」)
- (7) 藤左衛門は、辻々を練り、呼ばわって歩いた。(同前)

次に「練り歩く」の例を示すが、「練る」単独の用法の場合も含めて、全体に、こ

れは観衆に見せるための行動である点が特徴である。『新明解』がこの用法を「(人に見せるために、行列を作って)ゆっくり進む。」と記述しているのが注意される。ただし、上の例(6)(7)、次の(8)に見られるように、ただ一人の場合もある。

- (8) 上水の両側に群る人々の間を酔っ払って練り歩いたり、(上林暁「聖ヨハネ病院にて」)(これは千鳥足の点を強調するために用いた例であろうか。)
- (9) 街は驚くほどの人出で、ことに各町内の山車が勢ぞろいして練り歩く大通りは、身動きもならない雑踏だった。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)
- (10) 東京の街々を教師たちのデモ行進が練り歩いているとき、(石川達三「人間の壁」)
- (11) 十月初旬、長崎の町では、諏訪神社のおくんち大祭がひらかれ、華かな踊りの列が町々を練り歩き、笛や太鼓やチャルメラの音がにぎやかに流れた。(吉村昭「戦艦武蔵」)
- (12) また、祝祭の日の都大路を練り歩く緋衣黒衣の男たち、雪の降る庭で行なわれる宮中の秘儀。(田辺聖子「新源氏物語」)

「練りまわる」、「練り出す」という用例もある。

- (13) 敵の動かぬなかを、三万の織田軍が地を這う巨竜のように国中を練りまわった。(司馬遼太郎「国盗り物語」)
- (14) そのうち、どこかで聞こえていた笛・太鼓の囃子がしだいに近づき、行列の先頭が十字路を折れて大通りに練り出して来るのが見えた。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)

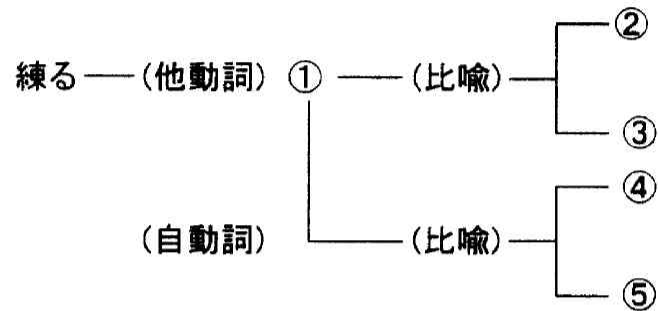
多義体系

上に記述した5つの意味を代表的な例の形で示すと、次のようになる。

- ① 餡を練る。
- ② 構想を練る。
- ③ 技を練る。

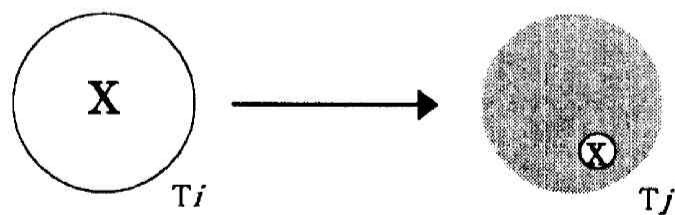
④ 舟は練りながら浮いている。

⑤ 行列は町中を練り歩いた。



残 る

自動詞「残る」に対して他動詞ないし使役形として「残す」がある。両動詞の意味・用法はほぼ平行しているので、ここでは「残る」の方だけを取り上げる。「残る」についてはすでに柴田他(1976)において「あまる」と対比させながら分析が行われている。そこに示された分析は次の通りである。



【図 1】

T_i におけるある状況 (あるいは量的に規定し得るもの) と、〈時間・環境の変化〉 $T_i \rightarrow T_j$ (あるいは思考作用) に伴う X の減少とが前提となって、 T_j において (X に含まれていたもののうち) x のみが存続することと言える。(柴田他 1976 : 285 - 6)

この分析に明記されているように、「残る」の重要な前提は、時間の経過が含まれているということである。もう一つの前提として、時間の経過に伴って、Xという量が減少して行くということがある。〈量Xの減少が進んでゼロになる前に量xの状態で停止する〉というのが「残る」の基本的意味(= 意義素)である。そして‘x’が「残る」の主語になる。

- (1) 教室にはまだ学生が残っている。
- (2) 西の空にはまだ明りが残っている。
- (3) 社員は全員帰宅せずに残っていた。

(1)のように可算名詞が主語のときは、その数の減少を指し、(2)のように「明り」という性質が主語のときは、その程度が弱まることを指す。(3)では数の減少が見られないが、これは例外的な場合であり、〈数の減少が期待される場面であったにもかかわらず、その減少は起こらなかった〉ということである。「残る」に伴う数量・状態の変化のありさまを違った角度から図示すると、図2のようになる。



【図2】

- (4) 海岸地方には朝方まで雨が残るでしょう。

例(4)では、降雨という出来事が主語になっている。これは、他の地域では雨がやむけれども、海岸地方ではやまない、ということである。出来事主語のときは「残る」は〈出来事が続く〉という意味になる。ほかの出来事としては、「風習・癖・習慣・制度」などがある。

「残る」の文型

「残る」事物はその存在場所を必要とする。それは「～に」(まれに「～で」)という副詞句で表現されるが、用いられる文中の位置としては、主語の前とうしろの両方の場合がある。この語順は文脈中の関係、話し手の重点の置き方により左右されると見られるので、「残る」の文型としてはどちらを主とするわけにもいかない。三つの場合がある。

A. [主語が場所に残る]

- (5) 英子はいわれるままに出て行き、多津子は風邪気味だといって部屋に残った。(石原慎太郎「化石の森」)
- (6) その中に一本の際立って若い、青いつややかな竹が目に残った。(三島由紀夫「金閣寺」)
- (7) 光秀は京に残った。(司馬遼太郎「国盗り物語」)
- (8) あの情なさや屈辱の感情は、永く私の中に残った。(五木寛之「風に吹かれて」)

B. [場所に主語が残る]

- (9) 路辺や陰に雪が残っていたが、道は乾いている。(賀川乙彦「湿原」)
- (10) 加藤は部屋の中を見廻した。押し入れに古新聞紙が二枚ほど残っていた。(新田次郎「孤高の人」)
- (11) 最近誰か人がここへ来たかもしれないと思った。小屋の内部に、それらしい跡がいくつか残っていたことと想像を合わせて見た。(同上)
- (12) 立っている幹はもうぼろぼろになっていて、見ると朽ちた木の割れ目の中、上下に黒く焦げた筋が残っていた。(高田宏「森のいのち」)

C. [場所には主語が残る]

- (この文型では「は」の提題性によって「に」の句が文頭に出されている)
- (13) 空に渦巻き状をしたねずみ色の高い雲がある。そこには夕暮れの光が残っていた。(阿川弘之「空港風景」)

- (14) これはその漁港には昭和の初めまで残っていた制度だ。(小川国夫「出発の不安」)
- (15) 私の唇にはまだ彼女の唇の感触が残っていた。(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)
- (16) 多くの日本人が足をかけたため、銅板をかこんだ板には黒ずんだ親指の痕が残っていた。(遠藤周作「沈黙」)

なおこれは文型とは関係がないが、「残る」の意味の反映として、「まだ」が併用されることが多いことをここで指摘しておきたい。冒頭の用例(1)(2)および次節の14例中の9例にそれが見られる。

「残る」の文脈的な意味

「残る」の基本義についてはすでに冒頭で説明したが、この動詞が実際に用いられる場合にはいろいろと異なった意味となって現れる。一般の国語辞典でも5つから7つの意味が分けられている。しかしこの異なった文脈的な意味は、主語が指す事物の性質の違いによって生じるものと言うことができる。次にその分類の一例を示す。

基本文型：〔(Xのうちの)xが残る〕

- (1) 人間：「この東京の焼跡にも、こういう人達が、まだ残っていたかと、思うんですよ」(大仏次郎「帰郷」)(他の人達は移動して姿を消しているが)
- (2) 物：坂上のほうの木には、まだ葉が残っていたが、薄くまばらで、かえって寒々しかった。(川端康成「並木」)(他の葉は姿を消したが)
- (3) 液体：三合七勺瓶には、中身がまだ三分の一ぐらい残っていた。(井伏鱒二「黒い雨」)(他の部分は消費されたが)
- (4) 表情：園田の顔には笑いがまだ残っていた。(山本有三「波」)(笑いの表情はだいぶ薄らいだが)
- (5) 感覚：口の中にはまだ軽い苦みが残っていた。(渡辺淳一「花埋み」)(苦みはだいぶ薄らいだが)
- (6) 映像の記憶：女が笑ったとき、また八重歯が覗き、それが栄二の目に残った。(山本周五郎「さぶ」)(映像の現物は姿を消したのに)

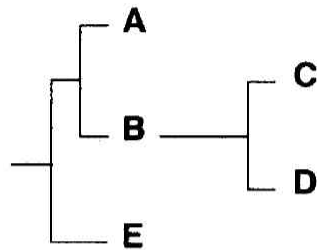
- (7) 明るさ：空にはまだ明るさが残っていた。(丹羽文雄「南国抄」)(明るさはだいぶ薄らいだが)
- (8) 状態：頬に当たって流れて行く風には、春の朝のまだうそ寒い湿りけが残っていた。(福永武彦「草の花」)(空気中の湿りけは目に見えないので状態としたが、物と考えることもできる。湿り気が消えないでということ)
- (9) 空間：(行司の言葉)残った、残った！(図2に基づいて言えば、左端が土俵の中央で、右端がふちの俵である。力士は相手に押されてふち俵の近くまで下がったということである。これが本来の意味であるが、これは観点を変えれば「まだ勝負がつかない」ということであるので、そこから土俵上のスペースとは関係なく、相手が仕掛けた技がまだ決まらない状態も指すようになっている。)
- (10) 時間：前刑の残りを含めて刑期はまだ十箇月残っていたが、(賀川乙彦「湿原」)(すでに何箇月か何年か刑に服したが、まだ服すべき刑期がある)
- (11) 記憶：少年工のこの独り言は後まで私の心に残った。(志賀直哉「灰色の月」)(記憶は消えて行く可能性があるが、消えずに)
- (12) 歴史：あのまま行けば、わしの名前は日本野球史に残っただろう。(井上ひさし「下駄の上の卵」)(歴史の記述から時間の経過とともに消えていかないで。(11)の記憶の社会版)
- (13) 出来事：(天気予報)雨は午前中まで残るでしょう。(続くでしょう)
- (14) 習慣：もうどこで昼間の時間を過ごしても同じようなものだが、それでもこの仮の宿に戻る習慣はまだ残っていた。(池澤夏樹「最後の一羽」)(習慣・風習などは時間の中で続行されるものであり、途切れる可能性も含んでいるが、途切れずに続行されたの意)

以上に列挙した意味は大きく次のようにまとめることが出来る。

- A. 数量が減少して無くならないで。(1,2,3)
- B. 程度・性質が弱まって消えないで。(4,5,6,7,8)
- C. 連続体の一部が消えないで。(9,10)
- D. 連続性が消えないで。(11,12)

E. 続行する出来事が中断しないで。(13,14)

これを更に体系化すると次のようになる。



【図 3】

視 く

「視く」の自他の区別

「視く」について大部分の国語辞典は自他の区別をしている(注)。「唇から白い歯が視く」のような物主語の場合を自動詞とし、そのほかの人間主語の場合はすべて他動詞としている。しかし実例を検討してみると、ことはそれほど簡単ではないことが分かる。『計算機』の分析は多くの国語辞典の記述を集大成した形になっており、かつ名詞の意味格と文型が明示されているので、考察の出発点として使わせて頂くこととする。ただしここでは見やすいように表記の仕方を簡略化して示す。[]は文型、〈 〉は意味記述、「」は具体例を示す。アルファベットで略記された意味格は日本語に直す；HUM：人間 CON：具体物 LOC：場所 ABS：抽象物。

「のぞく」(『計算機』)

- 1 自 [場所カラ具体物ガ] 〈何かの一部が見える〉「彼のポケットからハンカチが覗いていた。」「雲の切れ目から月が覗いた。」
- 2 他 [人間ガ場所ヲ] 〈穴やすきまなどを通して、反対側の様子を密かに見る〉「変な男が家の中を覗いていた。」
- 3 他 [人間ガ具体物ヲ] 〈穴などの中を見る〉「彼は望遠鏡を覗いた。」

- 4 他 [人間ガ場所ヲ] 〈そこに立ち寄る〉「彼は暇があると古本屋を覗く。」
- 5 他 [人間ガ(場所カラ)場所ヲ] 〈高い所から身を乗り出して下を見る〉
「彼女はがけの上から谷底を覗いた。」
- 6 他 [人間ガ抽象物ヲ] 〈他人に知られていない事をこっそり知ろうとする〉
「彼は何かにつけ他人の私生活を覗く。」

手元の「覗く」の用例は約200である。その中に「顔が覗く」の例が4例ある。『計算機』では「顔」は文型1に属させており、物扱いをされている。物と割り切ってよいかというのが第一の問題である。

- (1) そのとき、ガレージの中で、何かが動く物音がした。扉の一番端が開いている。そしてそこから、だしぬけに、うす汚れた男の顔が覗いた。
(北杜夫「楡家の人びと」)
- (2) 時間が迫って吟子は汽車に乗った。吟子の小さく整った顔が窓から覗く。(渡辺淳一「花埋み」)
- (3) 二階の娘の部屋の扉をノックすると、私の想像していたとはまるで違って見える娘の顔が覗いて、私を素早く部屋の中へ入れた。(岡本かの子「河明り」)
- (4) 暫くして窓の戸があいて、そこへ四十恰好の男の顔が覗いた。(森鷗外「最後の一句」)

『計算機』および一般の国語辞典で自動詞扱いをされている用法では、そこに示された実例から察すると主語は無意志のものという了解が裏にあると思われる。『計算機』では「顔」のほかに「ハンカチ、太陽」が挙げてあり、他の辞典には「品、下着、晴れ間、白髪頭、屋根」などが示されている。しかし上の4例の「顔」は人間の一部分としてメトニミ的に用いられているとも考えられ、文脈から見て、有意志動作を行なっていると見られる。そうすると、文型を[場所カラ具体物ガ]とすることが問題となってくる。上例(3)(4)では[場所カラ]が欠けているが、これをどう見るかということも問題になってくる。新しい文型として[(場所カラ)人間ガ]を認めることも考えられる。意味は〈人間が限られた空間、空き間からその先を見ようとして顔あるいは姿をあらわす〉となる。しかし実際はそう考える必要はない。あとで解るように「人が外を覗いている」は自動詞用法と

考えられるので「顔が（外を）覗く」はそれと同じと見る事が可能となる。

〔～覗くと（文）〕の表現

次に、文型としては上記と同じであるけれども、「覗く」の意味に若干のずれが認められる一つの表現型として「～覗くと（文）」がある。またこれは「覗く」の意味についての洞察の手掛かりともなりそうである。文型上主語まで省かれることがあるが、省かれた主語は人間であるとするのがデフォルト解釈であろう。この「覗く」の意味は〈限られた空間・空き間に近づいてその向うを見る〉ということである。こう考えると、『計算機』と同じように文型1に属させることは難しくなってくる。この表現では、あとに続く文表現がそこで目に捉えられた光景の描写となっている。この接続助詞「と」を伴う用法は、「を覗くと」の形でも用いられ、例はかなり多い。全体で200例中70例を数える。

A. 〔場所カラ覗クト〕

- (5) 船窓から覗くと、無数の島々の間を、船が通っているので、海面は、油を流したように、平であった。(獅子文六「娘と私」)
- (6) 開かれたドアからそれとなく覗くと、定刻だというのにまだ立っている者などがいてざわついている。(藤原正彦「若き数学者のアメリカ」)
- (7) 夕暮れになる頃、ふたたび格子から覗くと、蓑姿の男はまだ辛抱強く、雨にぬれたまま動かない。(遠藤周作「沈黙」)
- (8) 笹藪から覗くと、艶かしい女の笑い声が聞こえて、今度現われたのは二人連れの客だった。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)
- (9) 几帳が無造作に引かれて、すき間ができていたので、そこから目をとめて覗くと、宮は頬杖をついて、物悲しそうに沈みこんでいられた。(田辺聖子「新源氏物語」)
- (10) 門前には大簀が焚かれて、赤い火花が焰に交って立ち昇っている。ひょいと覗くと門内も同様一帯は代赭色に明るい。(子母澤寛「おとこ鷹」)(この例では「場所から」が欠けているが、文脈からそれは「門から」が省略されたものと推定できる)

B. [人間ガ覗クト]

- (11) 尾島は窓を開けて覗くと、「うちの社員たちだな。私を歓迎しようと待っているようです」(赤川次郎「女社長に乾杯！」)
- (12) 少年が、そっと近付いて覗くと、舞姫—惟光の娘—は、疲れたのか、物憂げに、物に寄りかかっていた。(田辺聖子「新源氏物語」)

ついでに上記の自動詞用法と平行した他動詞用法を見ることにする。その理由は、上の自動詞用法は以下の他動詞用法から[場所を] の部分が省略されているだけで、全体の意味は両者平行していること、つまり同じであることを示すためである。意味的にいうと、[場所を] が表現されてもされなくても「覗く」の意味は変わらないのであるから、このような文型の違いはあまり重視する必要がないことになる。どういう場所を「覗く」のかは、前後の文脈を見れば明らかであるのが普通であり、特に表現したいと考えたときだけ表現されるに過ぎない。

D. [場所カラ場所ヲ覗クト]

- (13) 手摺から下を覗くと、それでもあちこちに人影が坐っていないこともなかった。(北杜夫「楡家の人びと」)
- (14) 外から門内を覗くと、人も留守かと思うくらいに寂寞としていて、前栽の庭木だけが夏の勢いで繁っている。(大仏次郎「帰郷」)

D. [場所ヲ覗クト]

- (15) ふと、気になって、雪夫人の部屋を覗くと、まっ暗である。(船橋聖一「雪夫人絵図」)
- (16) 念のため、門を開けて、外を覗くと、誰もいず、初夏の暖かい風が、朧ろ月で、薄明るい街路を、吹き抜けていった。(獅子文六「娘と私」)
- (17) 不審に思っ中を覗くと、一万円札が十枚入っていました。(宮本輝「錦繡」)
- (18) 雨が一日降り続いた。夜、ふと目を覚まして窓を覗くと青白い光が見える。(賀川乙彦「湿原」)
- (19) 彼女が、烈しい腹痛に襲われていると思い、顔を覗くと、べつに、苦痛の表情はなく、目を閉じていた。(獅子文六「娘と私」)

〔場所ヲ〕の性質

以上に示した「場所を覗く」という用法は一般に他動詞扱いをされているわけであるが、その裏にはおそらくここで用いられた場所名詞が「覗く」という動作の直接の対象であるという解釈があるものと思われる。しかし上の「場所を覗く」という表現をよく見ると、「覗く」動作の真の対象はあとに描写されている光景なのであり、「を」の前の名詞は動作が向けられる漠然とした方向あるいは空間であるか、視線の通過点(「窓を覗く」など)を示しているのだということが分かる。次に示す具体物を指しているように見える場合も、実はその詳しい内容を知ることが目指されているのである。

- (20) 特に、隣の学生の答案を数秒間だけ横目で覗く、などというのは、捕らえ出したらきりがないほどよくあることなので、私などはゴホンと大きな咳払いをするくらいで収めてしまう。(藤原正彦「若き数学者のアメリカ」)(答案の中身が対象)
- (21) 夜晩く鏡を覗くのは時によっては非常に恐ろしいものである。(梶井基次郎「泥濘」)(鏡に映る自分の顔が対象)
- (22) 後には、銀ぶらのかわりに、映画を覗くか、玉を突かれた。(中谷宇吉郎)(映画の内容が対象)
- (23) 地図の中から山や森の情景がまるで魔法の水晶を覗くかのように見えてきたものだ。(賀川乙彦「湿原」)(水晶の中に見えるものが対象)
- (24) すっかり寝しずまっている上に、軒燈のついている家が藪いので、一つ一つ表札を覗くのにも骨が折れる。(尾崎士郎「人生劇場 青春編」)(表札に書かれた名前が対象)

ほかに「顕微鏡を覗く」、「望遠鏡を覗く」がある。この場合も顕微鏡などは道具であり、対象はその先に見える像である。『計算機』では「家の中を覗く」を場所とし、「望遠鏡を覗く」を具体物として区別しているが、根本的には両者は同じ働きをしており、家や望遠鏡の中の空間にあるものを見ようとしているのである。したがって、「顕微鏡で」という言い方も用いられる。

- そこで硝子板を紙につつんで外へ出して置いてすっかり冷え切ったところを取り出し、降って来る雪をその上に受けとって顕微鏡で覗くのである。(中谷宇吉郎)

ここで更に考え合わされるべきことは、「窓を覗く」は文脈によっては「窓から覗く」とも言えるということであり、ここに窓が覗く視線の出発点ないし通過点であることがうかがわれる。

以上の考察に基づくと、「名詞を」の部分「道を歩く」、「空を飛ぶ」、「溝を跳ぶ」、「門をはいる」などの自動詞と共に用いられる副詞的な補語と同じ性質のものであることになる。したがって「覗く」はすべての用法にわたって自動詞であるということになる。ちなみに、同じ意味を表す英語の ‘look into, peep into’ の look も peep も自動詞である。

「物が覗く」

従来他動詞とされてきた「覗く」が、実は自動詞であったということになると、従来自動詞とされてきた「唇から白い歯が覗く」のたぐいの用法は、人間主語を取ることを基本的用法とする「覗く」の擬人的比喩用法と考えることが可能になってくる。基本的用法では、人間が顔または目だけを現すことが多いことから、物を主語とするこの比喩用法でも、物の先端の一部だけが見えるということになる。『三省堂』でも「(物の)はし・先など」一部分があらわれる。」と記述されている。この点を確認するために、用例の一部を示しておこう。

- (25) たえば豪雨が止んで、雲の切れ目から青空が覗く頃。(林不忘「丹下左膳 こけ猿の巻」)
- (26) そして戸があくと、細長く狭い独房の、一番奥の壁にだけ通風の窓から青空が覗いている場所に、守屋恭吾が木の腰かけから立ち上がって、若い葉氏を見まもっていた。(大仏次郎「帰郷」)
- (27) 厚い流氷が割れて春の青々とした海が覗いてきたようだ。(賀川乙彦「湿原」)
- (28) 「...それ向こう三軒の屋根越しに、雪坊主のような山の影が覗いてら」(泉鏡花「売色鴨南蛮」)
- (29) どの家の塀からも大樹が覗いていて、樹の香が鼻を透して来た。(横光利一「旅愁」)
- (30) 上々の天気。硝子窓から柿の葉が覗いている。(林芙美子「放浪記」)
- (31) セーターはそのままもち上がり、ずり下ったズボンとの間に、おへそが覗いた。(「太郎物語 大学編」)

この物主語の用法で注意すべきは、どこから「覗いている」物を見ている人間が別に存在しているということである。それはその文の表現者であるのがふつうである。

「覗く」の基本的意味(＝意義素)と派生義

基本的意味を考えるに当たり、典型意味 (prototypical meaning) (cf. Taylor 1989) の考え方を導入して、「覗く」の典型的な場合を考えてみる。いろいろな派生義の元として自然であるように典型を考えて行く。それは、よそのうちの塀の穴からそっと中の様子をうかがっている姿である。この姿は私の言う現象素である。これから導き出されることとして、次のものがある。

- 見ようとするものは、普通にしていれば、見られないものである。
- 穴は一つで小さいので、十分に見ることが出来ない。見えにくい。
- 目をうまく穴の位置に持っていかなければならない。
- 往々にしてしゃがみ込むような不自然な姿勢を取らざるを得ない。
- こちらの存在を相手に悟られないようにしなければならない。
- 見つかるはずなので、時間は長くかけられない。

対象が見えにくい状況にあるところから、「谷底、穴蔵の底、他人の心の中」などに用いられる。時間をあまりかけられないし、さっとしか見られないことから、「古本屋を覗く」という用法が生まれる。ちょっと見るだけでは対象は十分には把握されないところから、「哲学書を覗いてみる」のような用法が生まれる。物がその一部を覗かせているときは、その全貌は分からないところから、次のような比喩的用法が説明される。

- (32) 底の知れない穴が、ポツカリと口を開けていて、そこから天才の独断と創造力が覗いている。(小林秀雄「モーツァルト」)

「覗く」の意義素：《人間が普通では見えにくい状態にあるものを見るために、見るのに 都合のいい位置に目を持っていき、不自然な姿勢を取りながら、短時間、不十分な がら対象についての情報を手に入れるために見る》

この意義素記述は、現象素を言葉で記述したものにはほかならない。

【注】『角川必』だけは例外的に「覗く」の自他を区別していない。しかし、この辞典では、すべての動詞についても自他の区別がなされていないので、本当に区別がなされていないのかどうかははっきりしない。自他の区別をしないということは一つの見識であるが、この辞典では、私の見落としでなければ、そのことはどこにも明記されていない。本文中に「自動詞・他動詞」の項目があり、そこでは自他の区別が説明されているのであるから、いっそうその区別を記述しないことについて、説明がなければならない。

参考文献

- 小内 一 (1997)、『究極版 逆引き頭引き日本語辞典』、講談社アルファ文庫。
 『角川必』＝『角川必携国語辞典』、角川書店、1995。
 『計算機』＝『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL (Basic Verbs) 一辞書編一』情報処理振興事業協会技術センター、1995
 『三省堂』＝『三省堂国語辞典第四版』、三省堂、1992。
 柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進著 (1976)、『ことばの意味 1 一辞書に書いてないこと一』、平凡社。
 『新明解』＝『新明解国語辞典第五版』、三省堂、1989。
 Taylor, John (1989), *Linguistic Categorization. Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford.

- 「日本語動詞の多義体系 (1)」、『人文学研究所報』No. 32, 神奈川大学人文学研究所、1999。
 「同 (2)」、『人文研究』No. 138, 神奈川大学人文学会、1999。
 「同 (3)」、『神奈川大学言語研究』No. 22, 神奈川大学言語研究センター、1999。
 「同 (4)」、『人文学研究所報』No. 33, 2000。